

茨城高等学校・中学校

校長室だより

2026年2月13日

春のうた

2024年6月の校長室だよりで、「夏のうた」という文章を書き、好評を博し(?)ました。書いていて自分もたいへん楽しかった記憶があり、今回は「春のうた」に挑戦してみようと思い立ちました。

2026年が訪れたと思ったら、あっという間に一月が終わり、立春も過ぎて、暦の上ではもう春です。今週の日曜日には、雪が降り、記録的な寒さとなりましたが、それでも春は一步一步近づいてきています。例によって脈絡なく、「独断、偏見が強くないかい?(北海道弁)」といったと批判をものともせず、あくまで個人的な好みに全力疾走して選んだ”春のうた”を紹介していきたいと思いますので、おつきあいください。

○ 石ばしる垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりけるかも 志貴皇子(万葉集)

「春のうた」で真っ先に頭に浮かんだのが、この歌です。国語の教科書でも常連の和歌なので、見覚え、聞き覚えのある人も多いでしょう。

春が訪れ、雪や氷が解け、山間の小さな滝は水量を増して岩の上を水が勢いよく流れ落ちていきます。ふと見ると、滝のほとりにわらびが薄緑の新芽を出しているではありませんか。ああ、春がやって来たのだなあ実感した、という歌です。

春という季節は、これという理由がなくても、なぜか心弾む季節です。「春がきたぞおー!」という作者の喜びは、千数百年の時を隔てて、現代を生きる私たちにも浸透してきます。「さわらびの萌え出づる春になりけるかも」と口ずさむだけで、頬をなでる早春の空気が感じられるような歌です。

作者の志貴皇子は天智天皇の第七皇子。文化人として生き、政治とは無縁の生涯を送ったと言われます。

○ 梅 山村暮鳥

ほのかな

深い宵闇である

どこかに

どこかに

梅の木がある

どうだい

星がこぼれるようだ

白梅だろうの
どこに
さいているんだろう

「宵闇」とは、夜のまだ浅い時刻の闇のこと。春の夜の闇はどこか甘美で、何か秘密を隠しているような感じがします。そんな印象を、作者は「ほのかな」そして「深い」と、相反することばで表現したのでしょう。春宵の濃密な闇の中、馥郁^{ふくいく}たる梅の香が漂ってきます。目で見ることにはできませんが、どこか遠くない場所に梅の木があるのです。その香りは「星がこぼれる」美しい夜空にたとえられています。

筆者の実家の裏山に梅の古木がありました。中高時代、2月ごろ、夜、テスト勉強などしていると、ふとやさしい甘い香りを感じることがありました。いつも夜遅くだったのは、視覚の効かない夜の方が嗅覚が敏感になるからでしょう。筆者はそれが梅の香とは気づかず、春の夜というのはなぜか良い香りがするものだなあ、などとふんわり考えていたのんきな少年でした。

山村暮鳥は、「おい雲よ/ゆうゆうと/馬鹿にのんきそうじゃないか」と呼びかける『雲』という作品で有名な詩人です。四十一年という短い生涯の最後を、水戸市や大洗町で過ごしました。暮鳥の墓は、本校にほど近い、水戸市松本町にある江林寺の墓所にひっそりとたたずんでいます。

○ 富士山／作品第肆 草野心平

川面^{かわづら}に春の光はまぶしく溢れ^{あふ}。そよ風が吹けば光りたちの鬼ごっこ^{あし}葦の葉のささやき。行行子^{よしきり}は鳴く。行行子の舌にも春のひかり。

土堤の下のうまごやしの原に。
自分の顔は両^{りょうて}掌の中に。
ふりそそぐ春の光りに却^{かえ}って物憂く。
眺めていた。

少女たちはうまごやしの花を摘^つんでは巧みな手さばきで花環^{はなわ}をつくる。それをなわにして縄跳び^{なわと}をする。花環が円を描くとそのなかに富士がはいる。その度^{たび}に富士は近づき。とおくに坐る。

耳には行行子。
頬にはひかり。

* 語注

・「行行子」 ヨシキリ。初夏から夏にかけて日本に飛来し、水辺の葦原に巣を作る鳥。ギョギョシ、ギョギョシと大きな声でさえずるのが特徴。

・「うまごやし」 マメ科の多年草。別名シロツメグサ、クローバー。日当たりのよい野原や道端、畑の縁など幅広い環境に適応し、茎は地面を這って伸び、緑のじゅうたんのよう広がって生育する。

この草野心平の詩もまた、国語の教科書に採用されることの多い作品です。

春もたけなわの頃、作者は、陽光と春風、そしてヨシキリのさえずりに包まれて、川の土堤下のウマゴヤシの原っぱに、腹ばいに寝転んでいます。頬杖をついた姿勢の作者の心のうちには、周囲の情景とは対照的な、メランコリックな感情が漂っています。

作者の目は、白いウマゴヤシの花で編んだ花環で縄跳びをする少女たちの姿に移ります。花環が円を描くと、よく晴れた空を背にした富士山が、その輪の中に出たり、入ったり。それはまるで、富士山が近づいたり、遠ざかったりするようにも見えます。そして、それを眺めている作者の耳には、変わらず、ヨシキリの声が響き、頬には明るい春の陽光が降り注いでいるのです。

辺り一面まぶしい春の情景。その中で小さな屈託を抱く作者。そんな作者をやさしく見守るような、花環の中に揺れる富士山。明るすぎる春は、人の心に、それとは真逆の小さな憂いを浮かび上がらせることがあるものです。古人はそれを「春憂」とか「春愁」とか名付けてきました。

自分が三十歳くらいのとき、国語科の先輩教師が定年退職を迎え、離任式での生徒たちへの最後の挨拶の際、この詩を引用していたのを覚えています。「遠くに富士山があって、花環の縄跳びをする少女たちがいて、それを見ている作者がいる。私は、そのさらに後ろにいて、遠くから、それらを眺めているような生活をしていきたいと思う」と話されていました。当時は、よく分からないながら、ああいい話だなあ、程度に聞いていたのですが、その先生と年齢が近づくにつれて、先生の気持ち、おっしゃりたかったことが、とてもよく分かるような気がします。

まるで一枚の絵画のような詩の中には、今も、ヨシキリのさえずりが響き、まぶしい春の光が躍っています。

○春と修羅しゅら／(mental sketch modified) 宮沢賢治

心象のはいろいろはがねから
あけびのつるはくもにからまり
のばらのやぶや腐植の湿地
いちめんのいちめんのてんごく詠曲模様
(正午の管楽よりもしげく
こはく琥珀のかけらがそそぐとき)
いかりののがさまた青さ
四月の気層のひかりの底を
唾つばきし はぎしりゆききする
おれはひとりの修羅なのだ
(風景はなみだにゆすれ)
砕ける雲の眼路めじをかぎり
れいろうの天の海には
せいはり聖玻璃の風が行き交い
ZYPRESSEN 春のいちれつ

くろぐろとエーテル光素を吸い
その暗い足並みからは
天山の雪の積さえひかるのに
(かげろうの波と白い偏光)
まことのことばはうしなわれ
雲はちぎれてそらをとぶ
ああかがやきの四月の底を
はぎしり燃えてゆききする
おれはひとりの修羅なのだ
(ぎよくずい玉髓の雲が流れて
どこで啼くその春の鳥)

…以下略…

* 語注

- ・「mental sketch modified」 改変された心象スケッチ。
- ・「腐植」 土壤中、動植物の死体が微生物のはたらきで分解されてできる有機物。
- ・「諂曲^{てんこく}模様」 「諂曲」とは、自分の本心を隠し、他人に媚びへつらって機嫌を取る事。従順を装って相手を欺く事。仏教では、煩惱^{ぼんのう}の(心を乱す執着や欲望)の一つとして戒めるべきものとされる。
- ・「琥珀」 植物の樹脂などが化石化した宝石。黄色や褐色の色あいのものが多い。ここではふりそぐ陽光の比喩と考えられる。
- ・「れいろう」 玲瓏。玉や宝石が透き通るように美しく輝く様子。
- ・「聖玻璃」 「玻璃」はガラスのことで、「聖なるガラス」の意味。教会のステンドガラスの意味か。
- ・「ZYPRESSEN」 ジープレッセン。ドイツ語で糸杉のこと。
- ・「光素」 エーテル。かつて、光が真空を伝わるための媒体として存在すると考えられていた物質。目に見えず、検出できない。
- ・「玉髓」 石英の細かな結晶が集合して固まった鉱物。

宮沢賢治が生前に刊行した唯一の詩集、『春と修羅』の表題ともなったのがこの詩です。

賢治は自らの詩を、「心象スケッチ」と呼んでいます。「わたくしという現象」は、「風景やみんなといっしょにせわしくせわしく明滅」する「因果交流電灯のひとつの青い照明」であり、「わたくし」とともに明滅するすべてが同時に感じるところの「かげとひかりのひとつさきずつ」を記したものが心象スケッチである、というのです。こうして自分で書いて、「？」という生徒諸君の顔が見えるようですが、「わたくし」という個の内面で次々と起こる現象、風景、感情、思考をありのまま捉えて、スケッチするように言葉で描写したもの、というふうに理解できるでしょうか？花巻農学校で教鞭を執る科学者、農学者でもあった賢治らしい発想だと思います。

『春と修羅』は、数ある賢治の詩のなかでも難解な詩の一つであると言われていています。特に理解が難しいのは、賢治が自らを「おれはひとりの修羅なのだ」と述べている点ではないでしょうか？修羅とはインドの戦いの神「阿修羅^{あしゅら}」を語源とし、仏教では争いや戦いの絶えない世界や状態を指す言葉です。言い忘れましたが、賢治は科学者である一方、熱心な仏教徒でもありました。

琥珀のかけらのような、まばゆい陽光が降り注ぐ真昼、空は透き通って輝き、聖なるガラスのきらめきのような風が吹く四月の美しい野辺で、それとは対照的に、苦く青い怒りに燃え、唾を吐き、歯ぎしりをしながら行き来する怒りの化身、修羅とは何者なのでしょう。よく肖像として使われる、黒っぽい上着を着て両手を膝の上で組んだ写真の、穏やかで生真面目そうな賢治は「修羅」とはほど遠く感じられます。敬虔な仏教徒であった賢治は、生涯独身をつらぬき、農学の知識を生かして、貧しい東北の農村の人々のためにその人生を捧げました。その厳しい自己抑制の生き方の中で、余人であれば取るに足りない小さな罪や欲望も、賢治にとっては許しがたい煩惱、己の内なる修羅のあらわれと捉えたのかもかもしれません。

また、賢治は数多くの童話や詩を書きましたが、それらの作品が生前に評価されることはほとんどありませんでした。創作者である以上、賢治のなかにも自分の作品を世に広め、多くの人に読んでもらいたい、評価されたい、という欲求はあったはずで、そんな賢治は、三十七歳の短い生涯を閉じる直前、書き残した大量の原稿を「これらは自分の煩惱だから、すべて焼き捨てて

ほしい」と弟の静六に頼んだ、といいいます。「いちめんの^{てんごく}詔曲模様」のなか「まことのことばはうしなわれ」と詩に記した賢治の「修羅」とは、もしかすると、書くこと、表現することの「修羅」だったのかもしれないあと、『春と修羅』を読んで、そんなことを考えました。

○ドラえもんの青を探しにゆきませんか 石田柊馬

タレントでモデルのアンミカさんに「白には200色あんなん！」という名言がありますが、ここでは、青にもさまざまな青があるということでしょう。「ドラえもんを探しにゆきませんか」ではなく、「ドラえもんの青を…」というところに、個人的にビビビッときてしまいました。

ドラえもんは、言わずと知れた日本のアニメが生んだ大スターです。未来から来た青色の猫型ロボットは、頼りないのび太がピンチに陥ると、お腹のポケットから、ひみつ道具を出して助けてくれるヒーローです。(実際には、のび太が道具を不適切に使用して、しっぺ返しをくらうというのがお決まりのパターンですが…)

ドラえもんは、子どもたちにとって、そして、かつて子どもだった大人たちにとって、いつまでも変わらない、夢と希望と自由の象徴なのだと思います。そんなドラえもんの「青」を探しに行くなんて、すてきな冒険が待っていきそうじゃないですか？

この作品は、ジャンルの上では俳句ではなく川柳に分類されます。俳句と川柳の大きな違いの一つに「季語」があるかないかという点があります。「そういえば、この句に“春”なんてどこにも書いてないよね？ どうして春の歌なの？ 責任者出てこい！」と思った人もいるかもしれません。でも「ドラえもんの青」を探しに行くのにふさわしい季節は、やっぱり春だと筆者は思うのですが、君はどう？

○フライングしないことだけ考えろ位置についたら順に春風 岡本真帆

陸上の短距離走、スタート直前の緊張の場面です。「スタートラインについた選手の張りつめた気持ちを詠んだ歌」という解釈もあるようですが、自分は、この歌の作者は、スタート位置に並んでいる選手ではなく、それを見ている観客なのだろう、と理解しました。

家族なのか友人なのか、いずれにしても応援している選手が今、スタート位置についています。選手の緊張感は作者にも伝染して、「フライングだけはするなよー」と手に汗握る思いです。するとその緊張感の中、スタートラインに並ぶ選手たちの端っこから順番に、やわらかな春風が吹きすぎていったのです。選手たちに「順に」風が吹いたことを認識した作者は、選手たちを広く見渡せる視点にいるはずです。そして作者は、選手の髪やユニフォームをやさしくなびかせる風に、明るい春を感じたのです。選手たちを吹き抜けた風は、一瞬の間の後に作者のもとにも届いたのでしょうか？

岡本真帆さんは平成2年生まれの若い歌人です。自分は『水上バス浅草行き』(ナナロク社)という歌集で彼女を知りました。

- ・ほんとうにあたしでいいの？ ずぼらだし、傘もこんなにたくさんあるし
- ・回送の電車の中でねむるときだけ行き着けるみずうみがある
- ・天井の木目のねこの名前すら思い出せないくらいに大人
- ・宇宙から見たら同じだ真夜中の映画も冬の終わりのたき火も

・きみだけの名の呼び方があったこと蹴った小石はやがて水路へ

繊細で豊かな感受性、独特のことばのセンスを持った人だなあ、と思ってファンになりました。

○生きる 谷川俊太郎

生きているということ
いま生きているということ
それはのどがかわくということ
木もれ陽がまぶしいということ
ふっとあるメロディを思い出すということ
くしゃみをする
あなたと手をつなぐこと

生きているということ
いま生きているということ
それはミニスカート
それはプラネタリウム
それはヨハン=シュトラウス
それはピカソ
それはアルプス
すえての美しいものに出あうということ
そして
かくされた悪を注意深くこぼむこと

生きているということ
いま生きているということ
泣けるということ
笑えるということ
怒れるということ
自由ということ

生きているということ
いま生きているということ
いま遠くで犬がほえるということ
いま地球がまわっているということ
いまどこかで産声^{うぶごえ}があがるということ
いまどこかで兵士が傷つくということ
いまぶらんこがゆれているということ
いまいまが過ぎてゆくこと

生きているということ
いま生きているということ
鳥ははばたくということ
海はとどろくということ
かたつむりははうということ
人は愛するということ
あなたの手のぬくみ
いのちということ

* 語注

・「ヨハン=シュトラウス」 ヨハン・シュトラウス2世。19世紀、オーストリアの作曲家。ワルツやポルカなどの舞踏音楽を数多く作曲し、「美しく青きドナウ」などの名曲を生み出した。

「美しく青きドナウ」はこちら <https://www.youtube.com/watch?v=dG8QOqAaSBM>

・「ピカソ」 パブロ・ピカソ。スペイン生まれの、フランスで制作活動を行った画家。キュビズムという新しい表現を生み出し、生涯で14万点以上の膨大な作品を生み出した。

どうしても好きな作家には偏りが出てしまうもので、一昨年書いた「夏のうた」でも紹介させていた谷川俊太郎先生に、今回もご登場いただくこととなりました。（書いていて気づいたので

すが、草野心平さんも再登場でしたね。)

さて、この詩にも「春」ということばは一切出てきません。それでもこの詩の持つみずみずしさ、静かな生命の躍動は、やっぱり春のうたなんじゃないかな？と思って、ラインナップに加えさせていただきます。

「生きているということ／いま生きているということ」というリフレインは、「生きる」という行為が抽象的、観念的な概念ではなく、この詩に触れるすべての人が、今という時間を、自らの生をリアルに生きているという単純な事実気づかせてくれます。読み手は、詩に導かれ、生きることの多様なかたちをたどりながら、自分自身の生を実感し、愛する人の手のぬくもりに、いのちの存在を感じ取るのです。

『今を生きるための現代詩』(講談社現代新書)で、著者の渡邊十糸子(としこ)さんが、この詩に関するご自身のエピソードを書いています。中学2年生、13歳の渡邊さんは、国語の教科書でこの詩に出会います。小学生のころから詩が好きだった渡邊さんは、しかし、この詩に出会って「こころがふるえなかった」と述べています。どこかの偉い先生が、「いい詩だから」と思って教科書に掲載した詩に自分が感動できないことに、疎外感を感じたといいます。

渡邊さんは、自身が『生きる』に感動できなかった理由を「この詩は詩に出会いたての中学生の理解力で“こなせる”ほど手軽な詩ではない」からだ、と述べています。それは「おとなの一般常識」、つまり「ピカソが二十世紀の美術にどんなインパクトをあたえたか、ヨハン=シュトラウスの作曲したワルツやポルカが現代のわれわれの暮らしの中にどれぐらい響いているものか。つまり彼らが人類にとって魅力的な、すてきな存在だということの了解」がなくては読めない詩なのだというわけです。「産声があがる」「兵士が傷つく」なども、おとなであることで、はじめて思い浮かべられる映像的イメージであり、この詩の理解には欠かせないといいます。

渡邊さんが「13歳のわたしは、この『生きる』という詩に込められたリアリティをまったく感じ取ることができなかったため、わたしにとってこの詩はうすっぺらな言葉の羅列にしか見えなかった」という詩を、今回、あえて中高生の君たちに紹介してみました。『生きる』は果たして、君のこころをふるわせることができましたでしょうか？(終)

※「校長室だより」は、本校のHPにも掲載しています。バックナンバーを読みたい人は、HPの「学校案内」→「校長室だより」からどうぞ。